佛教大学大学院紀要　第33号（2005年３月）

ロレンスのラストメッセージ

―『最後の詩集』「死の船」より―

松　本　桂　子

〔抄　録〕

D. H. ロレンスは、晩年を南フランスで静養に努めながらも創作を続け、価値ある諸作品を残した。中でも、刻々と迫る死を自覚しつつ書かれた詩「死の船」は、死後の魂を未知なる世界へと運び行く小さな船を象徴として、死という自然の摂理を独特の解釈と手法で描いた作品である。そこに凝縮された死生観にも通じる根本思想を追究することにより、ロレンスの最後のメッセージとして受け取りたい。

キーワード　方舟、聖書、エトルリア、復活、再生

『最後の詩集』（*Last Poems* 1932）はその表題のとおり、ロレンス（D. H. Lawrence, 1885－1930）の晩年に書かれた詩が収められたもので、11冊の詩集の最終を飾った作品群である。ロレンスは28歳のときに刊行した定型詩集『愛の詩集とその他の詩』（*Love Poems and Others*, 1913）を初めに、同じく韻をふんだ『恋愛詩集』（*Amores*, 1916）、『新詩集』（*New Poems*, 1918）、『入り江』（*Bay*, 1919）に続き、自由詩集では『見よ、ぼくらはやりぬいた！』（*Look! We Have Come Through!* 1917）、『亀』（*Tortoises*, 1921）、『鳥と獣と花』（*Birds, Beasts and Flowers*, 1923）、『三色すみれ』（*Pansies*, 1929）などを書き上げ、1928年には自らが編集した二巻本の『D. H. ロレンス詩選集』（*The Collected Poems of D. H. Lawrence*）を生前に残した。『いらくさ』（*Nettles*, 1930）と『最後の詩集』は死後出版されたものである。

1929年生涯最後の一年、ロレンスは南フランスのバンドル（Bandol）、スペイン領であるマジョルカ（Mallorca）、イタリアのルッカ（Lucca）、ドイツのバーデン・バーデン（Baden-Baden）を巡り、再び南フランスのバンドルに移り住む。『最後の詩集』に収められた詩「死の船」（'The Ship of Death'）は、二度目のバンドル滞在中の９月から10月にかけて執筆された。この頃のロレンスの体調は、日増しに衰弱の一途をたどるのみで、快方へ向かう兆しの見えない悪い状態にあった。エミリー・キング（Emily King）に宛てた1929年９月３日付け書簡の中で、山間のバンドルの穏やかな気候とはうらはらな、自身の病状を次のように述べている。

Lovely weather we are having here among the mountains—and people very nice— only damn it all, I'm not very well, and must stay in bed a day or two. I am really getting fed up with my health. (1)

上記の書簡から読みとれる苛立ちや悔しさとは異なり、心のうちでは差し迫った死をすでに予感していたのであろうか、「死の船」におけるロレンスの語り口調は、終始平静で、ありのままに末期を迎え入れる勇気と覚悟が感じとられる。しかし、ライト（T. R. Wright）が*D. H. Lawrence and the Bible*（2000）の中で下記のように指摘するように、因習的な既成の神を信ずることのできなかったロレンスは、詩中においてなおも彼の信仰を模索しているようでもある。

In *Last Poems*, however, the engagement with the Bible is integrated into a more sustained meditation on what Christian tradition labels the 'four last things' : death, judgment, heaven and hell. Lawrence, of course, does not understand these terms conventionally but, faced with his own imminent death, attempts to clarify what he still believes. (2)

一方、ロックウッド（M. J. Lockwood）は*A Study of the Poems of D. H. Lawrence*（1987）において、ロレンスが用いた聖書的な言葉は、神の手から、底知れぬ不死へと落ち行く魂を示していると云っている。(3)「神の手から落とされた魂」（a soul fallen from the hands of God）とは、信仰を失い異教に入り行く霊魂を想像することができる。いずれにしても、26歳から死の床につくまでの18年間、実際に巡礼とも言える異教の神を求めてさ迷ったロレンスは、「死の船」において、そしてまたその詩を書き終えた数ヵ月後の現実においても、最も長く遠い最後の旅路に着くことになる。このような観点から「死の船」を探究することで、そこに込められたロレンスの死生観を、彼の最後のメッセージとして受け取ることができるものと考える。

「死の船」の第一節は秋と落果のイメージで始まる。

Now it is autumn and the falling fruit
and the long journey towards oblivion.

The apples falling like great drops of dew
to bruise themselves an exit from themselves.

And it is time to go, to bid farewell
to one's own self, and find an exit
from the fallen self. (4)

「秋」（autumn）は収穫の季節でもあり、また死を意味する凋落期の象徴でもある。「落ちゆく林檎」（The apples falling）は、禁断の知恵の実を食べたアダムとイヴに訪れる不吉な前兆、つまり人類の破滅、黙示録的終末を予感させているのかもしれない。そして同時に一個人の死も、「自分自身に別れを告げ」（to bid farewell / To one's own self）で暗示している。

今まさに生死をさ迷う詩人の魂が、傷ついた肉体の中で怯えている様が第二節で語られる。

Have you built your ship of death, O have you?
O built your ship of death, for you will need it.

The grim frost is at hand, when the apples will fall
thick almost thunderous, on the hardened earth.

And death is on the air like a smell of ashes!
Ah! can't you smell it?

And in the bruised body, the frightened soul
finds itself shrinking, wincing from the cold
that blows upon it through the orifices.(5)

「無慈悲な霜はもう間近」（The grim frost is at hand）で残酷な死が迫り来ることを訴える。そして文字通り「死臭の立ち込める中」（death is on the air like a smell of ashes!）、やがて「林檎はうずたかく落ちてくる」（when the apples will fall thick）。'the apples' は人間を、'thick' はその数の多さを比喩的に用いている。また前の節でも見られる 'falling' やここでの 'fall' という言葉は、聖書における神の意図する本来の状態からの「堕落」の意味を含み、知恵の実を食べて堕落した人類への神の裁きとして、第一節に続き繰り返し死と滅亡を暗示させている。一方個人の死に対しては、己の「傷ついた肉体」（the bruised body）と「恐れおののく魂」（the frightened soul）に怯えていると打ち明ける。聖書に於ける死の意味は、すべての人々の心に恐怖を与える邪悪なものと見なされ、死と罪を密接に結び付けている。だからこそ詩人は優しく問いかけ、呼びかける、「きみはもう死の船を造ったか、おお造ったか？」（Have you built your ship of death, O have you?）、「きみの死の船をつくりなさい、それが必要になるのだから」（O built your ship of death, for you will need it）と。この呼びかけは詩の最後まで幾度も繰り返されることになる。時に支配されるこの世の宿命、誰にも避けることのできない死を受容し、準備することの必要性を説き続ける。

第三節からは詩人の自問自答が始まる。

And can a man his own quietus make
with a bare bodkin?

With daggers, bodkins, bullets, man can make
a bruise or break of exit for his life;
but is that a quietus, O tell me, is it quietus?

Surely not so! for how could murder, even self-murder
ever a quietus make? (6)

「短刀」（daggers）や「短剣」（bodkins）、「銃弾」（ bullets）で人間の生命を奪えても、それが最後の「止め」（quietus）になるのだろうかと問う。その返答は、生命に大きく立ちはだかる、人間の肉体の現実の死が、完全な終焉であるはずのないことを「よもやそうではあるまい！」（Surely not so!）で力強く確認している。

何故なら、肉体から離れた魂は、「死の船」（the ship of death）に乗って「忘却の、果てしない旅」（the longest journey, to oblivion）に出ねばならないのだから。先に述べたロックウッドの云う、あたかも神の手から落とされたような魂が、肉体から離れる様子が第五節で描かれる。

And die the death, the long and painful death
that lies between the old self and the new.

Already our bodies are fallen, bruised, badly bruised,
already our souls are oozing through the exit
of the cruel bruise. (7)

「古い自己と新しい自己の間に横たわる」（lies between the old self and the new）、つまり生と死の狭間にある長い苦痛に満ちた死の後に、そのひどく傷ついた肉体からやがて「魂がにじみ出てゆく」（our souls are oozing）。聖書では人間を単一体と見なしており、朽ちるべき罪深い肉体に閉じ込められた不滅の魂について述べてはいない。旧約聖書における魂の語義は、一人の人間の全存在である。新約聖書における魂という言葉の用法も、人間が骨や肉以上の存在であり、心や意志や人格を備えていることを意味しているが、死後の魂を表してはいない。従ってここまでは『創世記』にあるアダムとイヴの林檎を引用しながらも、キリスト教の教理とは裏腹に、詩人は肉体と魂を分離させたのである。

このような手法は、第五節の後半から益々強調されてゆく。

Already the dark and endless ocean of the end
is washing in through the breaches of our wounds,
already the flood is upon us.

Oh built your ship of death, your little ark
and furnish it with food, with little cakes, and wine
for the dark flight down oblivion.(8)

最初の「暗く終わりの無い終焉の大洋」(the dark and endless ocean of the end)、「すでに洪水が我々の上に押し寄せている」(already the flood is upon us) と、次の連の「きみの小さな船、その船に食料とほんの少しのケーキとワインを積み込め」(your little ark and furnish it with food, with little cakes, and wine) は、大洪水のノアの方舟の備えを想像させる。悔い改めない人々に対する神の怒りによって洪水が起こり、地上の動植物は全て死に絶え、神の言葉を信じたノアの家族だけが生き延びて神から祝福を受けたという『創世記』の話である。だが、「死の船」での方舟は肉体を持った人間ではなく、死後の魂が船出するためのものである。たどり着く港は聖書にあるアララテ山ではなく、「忘却の彼方の暗い飛行」(for the dark flight down oblivion) の先にある。この点について、ライトは次のように推測している。

He combines the traditional Christian image of 'the ark of faith' with more pagan
burial practices (possibly Etruscan) involving a 'little ark' furnished with food,
cakes and wine 'for the dark flight down oblivion'(9)

「死の船」の方舟は、伝統的なキリスト教のイメージと異教の埋葬の風習を兼ね備えたものであり、しかもその異教の風習とはエトルリア人（Etruscan）のものではないかと述べている。ロレンスは1927年に、ローマから北西の地タルクィニアの街にあるエトルリア遺跡を訪ねたことがある。エトルリアとはイタリアの地に開花した最初の文明をもつ国家で、紀元前７世紀から６世紀にかけて黄金時代を迎えた。しかしその栄華はローマ人の征服よって打ち砕かれ、約10世紀に及ぶエトルリア都市国家は終わりを迎えた。残されたものは墳墓のみで、エトルリア人が書いた文献資料というものは皆無に等しく、「謎のエトルリア文化」と呼ばれる所以である。ロレンスは、エトルリア遺跡で得た印象を自らの紀行文『エトルリア遺跡』(*Etruscan Places* 1932) の中で克明に記している。階段を下りて古墳の中の岩部屋に入ると、奇妙な静けさと不思議な和やかさが有ると云う。墓の作りはエジプトを思わせるが、全てが質素で飾り気がなく、気楽で自然な釣り合いを保つその美しさは、知的で精神的ないわゆるキリスト教的な調和とはずいぶん違うらしい。墓でさえも、生命の充実、息吹、自然や気楽さというものを感じさせる

古代のエトルリア気質にロレンスは感動する。古墳の最後の部屋には石造りの寝台がある。その上にかつて置かれてあった死者の神聖な宝物、あの世へ連れて行ってくれる小さな青銅の死の船にロレンスは思いを馳せる。エトルリアでは、たくさんの手荷物を携えて、この青銅の船に乗って死におもむくのである。「死の船」の方舟は確かにライトが指摘する、キリスト教のノアの方舟と異教のそれとを合体させたイメージなのだ。そして死は、エトルリア人にとって楽しい生命の続きで、宝石と酒があり、踊りのためにはフルートが奏でられたと云う。うっとりするような幸福でも、天国でも、また煉獄の苦しみでもなく、生命の充実が自然に続いたものであったのだ。(10)

ロレンスのエトルリアへの熱い思いは、詩「糸杉」（Cypresses）の中でも詠われている。イタリア西部のトスカナ地方に生い茂る糸杉を見て、エトルリア人の黙して語らぬ不滅の心情を重ね合わせる。炎のように天に向かい、静かに、しかし力強く伸びているその糸杉は、まるでエトルリア人のモニュメントのようであり、絶滅させられた民族の、死してなお息づく復活の姿を、慈しみ憐れむ心をもって映し出している。(11) 古代エトルリア文化に見る異教への、思慕にも似た憧憬は、晩年のロレンスの思考の中にこのように深く根ざしていたのである。

「死の船」では詩人の魂はいよいよ忘却の彼方へと、出口を求めて長い航海に出帆する。

Now launch the small ship, now as the body dies
and life departs, launch out, the fragile soul
in the fragile ship of courage, the ark of faith
with its store of food and little cooking pans
and change of clothes,
upon the flood's black waste
upon the waters of the end
upon the sea of death, where still we sail
darkly, for we cannot steer, and have no port.(12)

「さあその小さな船を出せ、いまや肉体は死に生命は旅に出る」（Now launch the small ship, now as the body dies and life departs）と出航を促す。'life' の意味するところは、肉体的死を越えた新生と受け取れる。終焉の後に訪れる新たな旅立ちは、次の再生を約束するかのようである。しかし食料や鍋釜、衣服を乗せた「信仰の船」（the ark of faith）はまだそこはかと無き暗闇をさ迷わねばならない。「洪水の黒い荒野を」（upon the flood's black waste）、「終末の海原を」（upon the waters of the end）そして「死の海の上を」（upon the sea of death）旅する。しかも己の意思ではなく、導かれるままに流れに身を委ねて。何故なら、「われわれには舵を取ることもできず、たどり着く港もないのだから」（we cannot steer, and nave no port）。

方舟は更に静寂の暗黒の深淵へと流されてゆく。

There is no port, there is nowhere to go
only the deepening black darkening still
blacker upon the soundless, ungurgling flood
darkness at one with darkness, up and down
and sideways utterly dark, so there is no direction any more.
And the little ship is there; yet she is gone.
She is not seen, for there is nothing to see her by.
She is gone! gone! and yet
somewhere she is there.
Nowhere! (13)

そこに在るのは、方角も定かでなくなるほどに「暗闇が暗闇をひとつとし、上も下も両脇も全く暗い」（darkness at one with darkness, up and down and sideways utterly dark）暗黒ばかり。哲学的エッセイ「王冠」（'The Crown'）の中でロレンスは述べている。ロレンスにとっての闇とは、「創造主の完全な闇」（the utter darkness of the Creator）(14) で、生命の根源であり万物の母体であると。「死の船」の闇も当然そのことを含蓄しており、新生を約束された方舟は、まるで羊水に漂う胎児のごとく描写され、取り巻く闇は生命の神秘を司る子宮であることを思わせる。そして、やがてその小さな船は見えなくなる。「消えてしまったのだ！」（She is gone!）。もう「どこにもいない！」（Nowhere!）。

すべてのものが忘却の彼方に消え失せ、沈んでしまった後に詩人はつぶやく、「それが終焉なのだ、それが忘却なのだ」（It is the end, it is oblivion）と。

だが、そこへ一筋の光線が降り注ぎ、おのずと暗黒の世界を分かち始める。

And yet out of eternity, a thread
separates itself on the blackness,
a horizontal thread
that fumes a little with pallor upon the dark.
Is it illusion? or does the fume
A little higher?
Ah wait, wait, for there's the dawn,
the cruel dawn of coming back to life
out of oblivion. (15)

この節では天地創造のイメージを巧みに用いて、闇が大いなる水の上にあり、神の言葉で光が闇から分けられる情景が鮮やかに目に浮かぶ。しかし、その「光は永遠の中から」（out of eternity）射すと云う。‘eternity’とは生成消滅のない無次元的な存在で、聖書とは異なったコスモス的発想であることを暗示させている。そして程なく、天地開闢の混沌から「曙だ、忘却から生命へ戻る冷酷な曙」（there's the dawn, the cruel dawn of coming back to life out of oblivion）が訪れる。夜がほのぼのと明け始める様子の‘the dawn’は、「誕生」という二重の意味を持って新生を強調している。しかしその誕生は「冷酷な曙」（the cruel dawn）だと云う。この世に再び生まれ出でることを、まるで煩わしく思うのかのようである。第一次世界大戦を経験したロレンスにとって現世とは、最後の長編小説『チャタレー卿夫人の恋人』（*Lady Chatterley's Lover*, 1928）の冒頭で述べているように、現代は「本質的に悲劇の時代」（essentially a tragic age）である。(16) それ故に、忘却の彼方へたどり着いた静寂からの目覚めは、面倒なことで苦痛をともなうものであるのかもしれない。しかし、同じく『チャタレー卿夫人の恋人』でロレンスは明言する「天が幾度も落ちてこようとも、われわれは生きなければならない」（We've got to live, no matter how many skies have fallen.）(17) と。たとえ絶望の淵にあったとしても、血潮の流れる肉体を持ったものだけが知り得る、生きる喜びの存在をロレンスは確信しているのである。だからこそ、「死の船」に乗った魂も、再び肉体を得るために冷酷な曙から目覚めねばならない。ここに、ロレンスの生に対する強い執着心を見る思いがする。

「死の船」に乗った魂の再生まではあと一息。とその時、ほとばしるような閃光が輝く。

Wait, wait, the little ship
Drifting, beneath the deathly ashy grey
Of a flood-dawn.

Wait, wait! even so, a flush of yellow
and strangely, O chilled wan soul, a flush of rose.

A flush of rose, and the whole thing starts again.(18)

「洪水の曙の死の灰煙る灰色の下で」（beneath the deathly ashy grey of a flood – dawn）漂う方舟に、「ほとばしるバラ色」（a flush of rose）の閃光が降り注ぐ。「ほとばしるバラ色、そして全てのものがまた始まる」（A flush of rose, and the whole thing starts again）のだ。‘rose’という語はロレンスにとっては特別の意味を持つ。数ある他の詩作品の中でも‘rose’、‘rosy’という表現が頻繁に用いられている。とりわけ、「葡萄」（Grapes）の詩の中では「たくさんの果実がバラから生まれる / あらゆるバラの中のバラから」（So many fruits come from roses / From

the rose of all roses)[19] と詠うように、多くの果実がバラ科に属していることを訴えている。本来ブドウはバラ科ではなく、ブドウ科の植物ではあるが、「氷河が騒がしい海と風のなかから集まり固まる前」(Before the glaciers were gathered up in a bunch out of the unsettled seas and winds)[20] までは、「ブドウの木は見えないバラだった」(Of which world, the vine was the invisible rose)[21] と主張している。世界がまだ混沌とした中にある時でさえも、「見えないバラ」が存在していたのだと云う。「見えない」とは人類に知識が備わっていないことの比喩である。即ち、ロレンスが連想するバラのイメージには、始生代もしくは原始のイメージが重ね合わされている。言い換えれば、それはロレンスの執着する暗黒の世界において生命を得たバラなのだ。「あらゆるバラの中のバラ」とはこのことを言い表しているのである。そして、「死の船」におけるバラ色の閃光もまた、全ての事の始まりを約束するかのように、魂に生命を注ぎ込む。

いよいよ再生の瞬間がやって来る。復活の時が訪れるのだ。

The flood subsides, and the body, like a worn sea-shell
emerges strange and lovely.
And the little ship wings home, faltering and lapsing
on the pink flood,
and the frail soul steps out, into her house again
filling the heart with peace.[22]

洪水が退いた後、静かに訪れる平安。「すり減った貝殻のような肉体が、不思議にもまた美しく現れる」(body, like a worn sea-shell emerges strange and lovely)。漆黒の闇の中、猛り立つ洪水は、バラ色の光を反射して「薄紅の水」(the pink flood) に変容する。その上を、蘇るべき肉体と魂を乗せた小船は家路へと急ぐ。この連で与える印象は、ボッティチェリ (Sandro Botticelli) の絵画『ビーナスの誕生』(*Birth of Venus*) を連想させる美しいものだ。海の泡から誕生したというギリシア神話のアフロディテの絵は、写実的な科学的な正確さではなく、どこまでも優美で繊細な愛の女神である。絵画の中では、バラの花に囲まれている風の神ゼフュロスとクロリスが、貝殻に乗った生まれたてのアフロディテを岸辺へと運んでいる。それは科学とは対立した、また聖書的な匂いもしない自然な姿である。

こうしてビーナスのように美しい肉体とか弱い魂が再び蘇り、その喜びを「揺れる心」(Swings the heart) で言い表している。そして最終連でもう一度、詩人は死の船の必要性を説く。死の船の準備をしておくのだ、忘却への航海が君を待っているのだからと。

Swings the heart renewed with peace
even of oblivion.

Oh build your ship of death, oh build it!

for you will need it.

For the voyage of oblivion awaits you.[23]

1930年３月２日夜10時、病が急変したロレンスは、南フランスにあるヴァーンス（Vence）でついに逝った。享年44歳５ヶ月という若さだった。妻のフリーダ（Frieda Lawrence）はその時の様子を自らの著書 "*Not I, But the Wind...*"（1935）で振り返っている。「息で膨れるその胸の中の生命の糸の断たれるときが来たのです。面変わりが起こり、頬と顎ががくっとして、こうして死が彼を捕えたのです」（The moment came when the thread of life tore in his heaving chest, his face changed, his cheeks and jaw sank, and death had taken hold of him...）。[24] この瞬間、ロレンスの魂もまた肉体から離脱し、暗黒の大海原へ、温かな母の子宮の中へと、新しい生命を求めさ迷う旅人として漕ぎ出したに違いない。

行き着く先は天国でも地獄でもない。復活を期した魂は、死の船の流れに身を任せて忘却の彼方へと流れ着く。死から生へと旅する魂、それは四季にも似た周期の繰り返しを意味する。春から夏、秋から冬そしてまた来るべき春を迎えるための再生の循環なのだ。死を受容すると云うけれど、それを受け入れることは容易なことではない。しかし、こうした自然の摂理と人間の死を重ね合わせることによって、ロレンスは安らかな死の床に着くことができたのかもしれない。そしてまた、ここまで読み進めて知り得た事は、ロレンスの望む復活とは、キリスト教的なものではなく、異教の魂の輪廻転生、エトルリアという古代異教に沿ったものであった。迷いの世界を生まれ変わり死に変わり、肉体的死を超えて不死鳥のように蘇ること、この思いは生への執着心そのものであり、ロレンスにとって、死は正に生きることの意味に他ならなかったのである。詩「死の船」とほぼ同時期に執筆され、絶筆となったエッセイ『アポカリプス』（*Apocalypse* 1931）において、ロレンスは次のような言葉を残している。

For man, the vast marvel is to be alive. For man, as for flower and beast and bird, the supreme triumph is to be most vividly, most perfectly alive. ...We ought to dance with rapture that we should be alive and in the flesh, and part of the living, incarnate cosmos. I am part of the sun as my eye is part of me. That I am part of the earth my feet know perfectly, and my blood is part of the sea.[25]

これは生命に対する称賛の辞である。人も自然も宇宙の一部であり、四季の移り変わりと同様に、人間の命も永劫回帰が約束されるべきことを裏づけている。同じく、「死の船」でロレンスが詠ったものも決して「死」それ自身ではなかった。方舟の必要性の執拗な訴えは、復活への必須条件であり、その根底にあるメッセージとは、死者への挽歌ではなく、まさしく生への賛

歌そのものであったのだ。

〔注〕

(1) Keith Sagar and James T. Boulton (ed.). *The Letters of D. H. Lawrence VII.* Cambridge: Cambridge, 2002. pp.460-461

(2) T. R. Wright. *D. H. Lawrence and the Bible.* Cambridge: Cambridge, 2001. p.247.

(3) M. J. Lockwood. *A Study of the Poems of D. H. Lawrence.* Houndmills: Macmillan, 1987. p.169.

(4) Vivan de Sola Pinto and Warren Roberts (ed.). *The Complete Poems of D. H. Lawrence.* Harmondsworth: Penguin, 1993. p.716.

(5), (6) *Ibid.*, p.717.

(7), (8) *Ibid.*, p.718.

(9) T. R. Wright. *op. cit.* p.249.

(10) D. H. ロレンス著、鈴木新一郎訳、『エトルリア遺跡』、不死鳥社、1969.

(11) 古我正和、『ロレンス研究－西洋文明を超えて－』、大阪教育図書、1996.

(12) Vivan de Sola Pinto &. *op. cit.* p.719.

(13) *Ibid.*, p.719.

(14) Warren Roberts and Harry T. Moore (ed.). 'The Crown' in *Phoenix II.* London: Heinemann, 1968. p.377.

(15) Vivan de Sola Pinto & *op. cit.* p.720.

(16) D. H. Lawrence. *Lady Chatterley's Lover.* Harmondsworth: Penguin, 2000. p.5.

(17) *Ibid.*, p.5.

(18) Vian de Sola Pinto & *op. cit.* p.720.

(19), (20), (21) *Ibid.*, p.285.

(22), (23) *Ibid.*, p.720.

(24) Frieda Lawrence. *"Not I, But The Wind?".* Kingswood: Heinemann. 1935. p.275.

(25) D. H. Lawrence. *Apocalypse.* Harmondsworth: Penguin, 1995. p.149.

（まつもと　けいこ　　文学研究科英米文学専攻博士後期課程）
（指導：古我　正和　教授）

2004年10月15日受理